

# 装飾古墳の民俗学

Folklore of the Kofun Period Decorated Tombs

橋本裕之

- ①装飾古墳における想像力
- ②民俗的想像力における装飾古墳
- ③装飾古墳にまつわる伝承
- ④装飾古墳の受容史

## 【論文要旨】

本稿は後世の人々が古墳をいかなるものとして解釈してきたのかという関心に立脚しながら、装飾古墳にまつわる各種の伝承をとりあげることによって、装飾古墳における民俗的想像力の性質に接近するものである。そもそも古墳は築造年代をすぎても、その存在理由を更新しながら生き続けるものであると考えられる。古墳は多くのばあい、今日でも地域社会における多種多様な信仰の対象として存在しているのである。といっても、こうした位相に対する関心は考古学の領域にとつて、あくまでも周辺的かつ副次的なものであった。

だが、後世の人々が付与した意味、つまり土着の解釈学を無知蒙昧な妄信にすぎないとして、その存在理由を否定してしまうことはできない。それは古墳にまつわる民俗的想像力の性質に接近する手がかりを隠しており、古墳の民俗学とでもいふべき未発の課題にかかわっている。とりわけ特異な図文や彩色を持つ装飾古墳は、その存在が古くから知られているばあい、民俗的想像力を触発するきわめて有力かつ魅力的な媒体であつたらしい。本稿はそのような過程の実際をしのばせる事例として、虎塚古墳・船玉古墳・玉塚古墳・重定古墳・珍敷塚古墳・石人山古墳・長岩横穴墓群(108号横穴墓)・チブサン古墳などにまつわる各種の伝承をとりあげ、民俗的想像力における装飾古墳の場所を定位する。こうした事例は考古学における主要な関心に比較して、あまりにも末梢的なものとして映るかもしれないが、現代社会における装飾古墳の場所を再考して、装飾古墳の築造年代以降をも射程に収めた文化財保護の理念と実践を構想するための恰好の手がかりを提供している。地域社会における装飾古墳の受容史を前提した装飾古墳の民俗学は、そのような試みを実現するためにも必要不可欠であると思われるのである。